

「季節感のある生活をしましょう」

園長 高杉美稚子

1、野菜の名前していますか？

先日は、お芋掘り遠足に出かけ、子ども達は、大変良い体験をする事が出来ました。前もって、お芋は、どんなふうになっているのかたくさんお話して出発していきましたが、実際に広いお芋畑について、葉、つるの様子にまず驚き、次々に出て来るお芋に歓声をあげ、その実体験にまさる教育はないと子ども達の生き生きとした様子に改めて思いました。

持って帰る時、重くて、涙が出るくらいのお友達もいましたが、子ども達が頑張った分、その日の夕食は、お芋料理で食卓が、賑わったことでしょう。

芋は、「腸の掃除やさん」といわれる食物繊維が、豊富に含まれています。食物繊維は、長い間無価値とされてきましたが、摂取する事で、腸疾患や肥満などの予防、食品添加物などの有害物質を早く体の外に排出する作用等、消化されなくても生理的に重要な役割を果たしています。

今、便秘に悩んでいる子ども達も多いといわれています。

幼児の場合、一日15から20g程度の繊維をとる事が望ましいと言われていきますので、海藻、野菜、穀物から食物繊維をとるように献立を考えましょう。野菜といえば、ある調査で、日本全国の各地から小学生を一定人数ずつ選び、魚の「さけ」の絵を書かせたそうです。その結果は、都会に住んでいる子どもに数多く、「さけの切身」を描く子どもがいたという事です。

幼児から中学生までに、魚と野菜の名称を尋ねてみた所、魚ではいか、たこ、かに、野菜では、キャベツ、カボチャ、トマト、ピーマン、キュウリ、なす、だいこん、にんじん、だけが70%の解答があり、もやし、さつまいも、ごぼう、かぶ、は10人のうち7人、いわし、さんま、かぶ里芋は10人の内9人が知らないと解答しています。

又、「りんごって何処で捕れるか知ってる？」という問に、胸を張って「スーパーマーケットでしょ」と答えた笑い話のような実話も聞きました。テレビで流れるお菓子の名前には、驚く程博識ですが、自分が食べている野菜、魚の

名称となると首を傾げる子どもが多くなってきています。体の名称を知らない子どもも増えてきました。これも同様に、子どもの体験不足が原因ではないかと心配です。これは、日頃の食生活とも無縁ではありません。一つにはハンバーグ、カレーなど同じ物を食べているという事が考えられます。栄養のバランスも心配です。第二には、実際に食べているのに、知らないといった場合です。これは、近所に畑や川がないといった現代の環境の変化の影響もありますが、だからこそ、それを補うために、食事前、食事中の態度も大切です。こちらは、栄養だけではなく心のバランスが心配されますから、問題は大きいのです。野菜を調理する母親の姿を眺める、手伝う、そして、一緒に食事し、語りあう、片付けるといった中で、母親に、父親に兄弟に話を聞きながら、心のバランスを培い、物の名称も覚えていくという体験が必要です。子ども達は全て、体験の中からしか学ぶことが出来ないのです。本園のいう体験教育の大切さがまさにここにあります。家庭の中でも、子どもとの対話の中で、又、季節感を取り入れながら、実体験の中で、ものの名前を知る機会を増やしてあげて頂けると子ども達も瞳を輝かせて話に聞き入ってくれる事と思います。

2、幼いうちから自然に親しむ習慣をつけておきましょう

我が子が頭の良い子に育ってほしいと願わない親はいないでしょう。

では、子どもの頭をよくする方法には、どんな事があるのでしょうか？

小さいうちから、漢字、算数を教える？いいえそうではありませんね。その事はお母様が自分の経験の上から一番ご存じの事でしょう。それは、単に成績のみが良い子どもが育つかもかもしれませんが、真に、「頭のきれる子ども」には育つとはいえないでしょう。

本園の教育理念の中にもありますが、究極の所、学童期に集団生活の中で、学んでおかなければいけない事は、社会に出て、自分自身でどう生きてぬいていくか、その力を身につける事です。その意味において、親が、子どもを無菌状態にしてあげる事は、無意味といえます。

又、子どもの為といいながら、つらい、悲しい、困難な実体験を前に、前に摘みとる事は、子ども達にとって、本当にいい環境とはいえないことはいつもお話していることですね。親の良い働きかけで子どもの興味の示し方は随分違

ってきます。「昆虫記」を書いたファーブルも、そのきっかけは、母親のたった一言の言葉かけだったと伝えられています。

又、「世界中で天才とよばれている人の幼少時代を調べてみると、半数以上の人が、じかに土や草木に触れられる場所に住んでいた」という調査結果がある事を知りました。これは、幼少期に、花や、昆虫を初めとする自然物に親しむ事が、人間の脳を成長させるのに、どんなに大切かを示しています。

園児達は、10月、芋ほり遠足や、園外保育でのどんぐり拾い等を通して、自然の不思議さに多くの事を学んでくれました。体験する事の素晴らしさは、子どもの瞳の輝きが一番物語っています。

小さなコオロギでさえ、その足の動き、飛んでいく様子、羽の羽ばたき、そのちょっとした動きにも、素晴らしい変化があります。その一つ、一つの動きを子ども達が自分の持てるだけの興味で眺めているとすれば、子ども達の脳のスクリーンに描かれる映像は、数十万枚に及ぶ事でしょう。その情報の量たるや、室内遊びやコンピューターゲームの比ではありません。この情報量の刺激が多い程が、脳を成長させ、単に成績が良いのではない、学んだ知識を生きた知恵に変えることが出来る感性を持ったいわゆる「頭のきれる」子どもに育つのです。そして、その事により園の教育方針の中にもある、「自分に与えられた情報を取捨選択し、分析して自分に役立てる能力を培う」基礎が培われていくのです。又、自然物に触れ、何故、どうして？と疑問を追求していく事は考える力を貯え、子どもの頭をよくするばかりでなく、情緒面を豊かにします。生きる、死ぬという最もシビアな問題にぶちあたることによって、「命の大切さ」や思いやりの心情を豊かに育む事が出来ます。

子ども達が高校、大学、成人になった時に、本当に要求されることは、単なる記憶力ではなくいかに考えるか、どのように考えることが出来るかという「思考力」にほかなりません。

単なる記憶力に頼れるのは、高校入試までです。「幼いころ天才、中学生は普通の人、高校生になったら落ちこぼれていた」など言うことをマスコミで聞いたことがあります。中学校までは詰め込みの記憶力に頼れていても、高校、大学以上の学問になってくると、たとえば歴史だとすれば、ただ年表を覚えるだけでなく、「なぜ、その年にその事件が起こらなければならなかったのか」

という歴史的背景を考えることが出来る力が必要とされるからでしょう。

だから、吉塚幼稚園の教育理念でもある「体験を通して感性を磨き、思考力のある本当の知恵のある子どもを育てること」が大切なのですね。その為に、そんな体験をたくさん保護者の方もご家庭で、子ども達と共につんで頂きたいと思います。又、その感動を子ども達の目の高さになって共にして頂きたいと思います。

野外で遊ぶには少し肌寒い季節となりました。だからこそ、毎日でなくとも、休日には、外に出掛けてみましょう。そして、子ども達の興味を伸ばしてあげましょう。第二のファールブルの誕生になるかもしれません。

3、大切にしましょう 季節感！

少し暖かい日があるかと思えば、おもわず、セーターを出したくなる程、冷え込む日もあるそんな今日この頃です。

昔より、人間が贅沢になったのでしょうか。「こたつ」と「クーラー」が必要な期間が長くなったような気がします。「春」と「秋」があっというま、「冬」と「夏」がやけに長く感じているのは私だけではないようです。

子ども達と話していて、最近、1番に感じる事は、季節が理解出来ない子ども達が多い事です。自然でも、春咲く花、夏咲く花、秋の花がわかりません。どうぞご家庭でも桜が咲いたら「春になったのね。桜がきれいね。」秋になったら、「お空がきれいね」等、季節感を盛りこんだ言葉かけをして頂きたいと思います。お母さんのその言葉かけ一つがあるかないかで子ども達の季節感がぐんと身近なものとなるでしょう。

又、日本は、春夏秋冬の四季がはっきりしている為、昔から、季節感を大切にした、食生活が営まれてきました。四季と食生活は密接な繋がりが有り、季節に合わせて美味しい食品がでるので、これらを上手に生かして、季節感のあるものを作りましょう。

季節食というのは、特別な材料で、特別な物を作る事ではありません。お母さんの想像力をフルに使って、子どものニーズを食事に生かしてあげる事が大切です。そっと目を閉じて思い出す時、誕生日のごちそう、夏のすいか、おはぎ、どれも子ども達の心に強く残り印象的です。こうした思い出の一つ一つが子どもの情緒を大きく育てていきます。子どもは、体験を通して、心を通して

季節を感じとっていきます。季節の行事を生かして、楽しい食生活を送り、心の豊かな子ども達を育てましょう。

「1月は行く、2月はにげる、3月は去る」の言葉通り、1、2、3月はあっという間に過ぎていきます。だからこそ、心落ち着けて子どもの心、言葉にもそして自分の心の声にも耳を傾けて行きたい季節です。

今年も子ども達の素晴らしい、言葉、子どもの心の声を保護者の方に届けてきました。子ども達の言葉や行動の足跡である「お話の宝石箱」は子どもが素晴らしい「生命共感体」である事を、私達に教えてくれています。今年から始まった子育て情報ラジオ番組「ぞうの時間・子どもの時間」でも、外部の方に人気のコーナーとなっています。

今までの宝石箱の中を覗いてみると

園児 「風さんと風さんがお話している」

保育者「何、話しているのかなあ」

園児 「うん、風さんに聞いてみるね」

又ある日の事、

園児 「先生ね、ぼくねえ、昨日とった虫、全部逃がしてあげたとよ」

保育者「本当！虫さんもその方が喜ぶよね」

園児 「うん、だって虫が外に行きたいっていいよったっちゃもん！」

子ども達の五感の発達と感性は、本当に素晴らしいものがあります。いや幼い子ども達だからこそ、素敵な発見が多いのかもしれません。

日々の生活に追われがちな大人は、いつのまにか、このとぎすまされた五感が鈍くなり、感性を失いつつあるのかもしれない、それを只、今までの経験という貯金で補っているにすぎないのではないかという事を感じます。

子ども達は、木、風、石、動物、植物、イスや机でさえ、感じる心を持つ生命としてあらゆるものと交流できる「生命共感体」といえるのではないのでしょうか。大人には見えない「風」が子ども達には本当に見え、大人には聞く事が出来ない虫の話し声が子ども達には、本当に聞えているのかもしれません。

今年の「幼稚園フェスタ」もこの五感ということをテーマに取り組んだのもここに 있습니다。テレビゲームなどの影響もあり、頭の上の部分でしか思考せず、呼吸が浅くなり、体全体で、「これでよし」と、納得するような決断が出来ない。だから、自分の考えに迷いがあり、自己決定できなく、自信喪失になり、自己責任がとれなく、結果として自己肯定感を持てずに、自尊感情が育たずに大きくなって、子ども達はいえ、大人も迷っているのです。

こんな時代だからこそ、この21世紀、既に2004年、年は変り、時代は変化していきますが、この感性を大切に、子ども達のイマジネーションの世界を誘発する環境設定を今年も続けていく事が子ども達の発達にかかせないものである事を「お話の宝石箱」を通して再認識出来る事を嬉しく思います。

また「お話の宝石箱」を読んでいると改めて、子ども達のパワーやエネルギーの素晴らしさを感じとる事が出来る事を感謝しています。

これからも、子ども達のあらゆるものに対する共感性に共に、驚いたり、感動できる私達でありたいと思います。大人の感覚とは違う、視界の広さを、時として、私達も見習いながら、子どもと共に歩んでいける2004年であることを願っています。「わが子を取り巻く環境としてのすべての園児の成長なくしてわが子の成長はありません。」どうぞ、我が子だけでなく、すべての子ども達の姿を応援して下さい。

さて、寒さも一段と厳しくなる季節ですが、年末、年度末に向けて毎年、この時期になると「皆勤賞」を目指しての無理な登園が見受けられます。

この「皆勤賞」を目指して頑張るという心意気は、とても素晴らしいものがありますが、あくまでも結果として与えられてこそ意味があるのではないのでしょうか。「皆勤賞」にこだわり、風邪をひいていても、伝染性疾患があっても無理に登園するのは本末転倒といえるでしょう。どうか、お母様のそう明な判断で意義ある「皆勤賞」にしてあげて頂きたいと思います。

園では、作品展示に向かって園児達は、力一杯自分の表現能力を高めてくれました。グループの中で協力しあう事の大切さや、最後まで頑張る事の大切さを実感しながら、一人一人が、自分自身の思いを形に表現してくれていましたね。作品を通して、その向こうにあるそれぞれの育ちの姿をほめて、認めて、励まして頂けるきっかけになったなら嬉しく思います。